
分かれ道

如月 琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

分かれ道

【Zコード】

Z7886Y

【作者名】

如月 琴李

【あらすじ】

5月の雨の放課後。新一は快斗に声をかけた。親友としてではなく、探偵として。ずっと一緒にいたはずなのに、1つの秘密が、全てを壊す。阻止しようとするとする者がいる。……逃げたいのか、逃げたくないのか。その微妙な距離感は、二人にしか、分からない。

(これは、パラレル小説 Devilangel の前振りです。が、単品でも読めます。もしも、既にお読みの方は、27話より前に目を通すことをお勧めします。ちょっとだけ閲わってきます)

連れ行く者（前書き）

設定：新一と快斗の二人は同じ学校に通っていて、寮生活を送つております。原作設定な日常です。平次と探はクラスメートです。要するにものすつじいご都合主義な話です…。

原作では怪盗と探偵として出会った二人ですが、このパラレルでは違います。そういう違いを受け入れられる方はどうぞ。

連れ行く者

甘く切ない恋物語なんてまだ経験していなかつた彼らには、その事実は何よりも鮮明で、苦渋に満ちて、けれど負に捕らわれ過ぎるには未来に繋がり過ぎていた。

ザアアア……

昨日の五月晴れが嘘のように今日は梅雨真っ只中のような激しい雨が降つてゐる。そんな中、少年が傘を差し、寮への道を真っ直ぐ歩いていた。時折黄土色に濁つた水たまりが足元に現れて、長い学生服に包まれた足のために、直進も飛び越えるのも阻まれて、結局進行方向に多少のブレが生じる。それに、軽く舌打ちしながらも彼は下ばかり見ており、傘から顔を上げなかつた。

注視すればそういうことになるのだが、それは、不自然でも何でもない。そんな生徒は横にも後ろにも沢山いて、彼はその一人でしかないのである。

田をつぶつていたつて知つてゐる道でもさすがにぬかるみは危険。アスファルトではなく運動場のような微量の土で覆われた地面と傘から出ざるを得ない足に細心の注意を向けなければクリーニング代に泣く羽田になる。分厚い曇天に、上げる顔も馬鹿らしくくらいの季節はずれの土砂降りの雨なのだ。

「黒羽快斗」

そんな彼の後ろから掛かつた声は、小さかつた筈なのに雨音に邪魔される事なく、彼の耳に飛び込んできた。わざわざ苗字付きで呼ぶ声は快斗自身の声を僅かにテノールにしたように良く似ており、張りのある声は彼に微かに笑みを溢させる。それは勿論声の主には見えていないから。

そうでなかつたら、この一瞬にして場に張り詰めた緊張感の中、

笑うことなんて出来ない。背後から貫かれるような視線を受けてそんな顔をすればすでに認めたようなものである。

(ショ一の始まり……かな?)

少し不謹慎な事を考えて、快斗は振り返る。緩慢でやる気のない、しかし蔑ろないがしにしているとは言い切れないスピードで。

「何? ってかなんでいきなりフルヌーム?」

雨に似合わない人懐っこい笑みを浮かべ、何でもない放課後を演出する。

それはまさに親友に声を掛けられた、単なるひとりの高校生男子。いや、もし仮にそう見えなければ不自然で、だから彼は自らの態度でもって忠告する。どこまでが親友に対してのもので、どこからが探偵としての視線か、一番近くで見ていれば、嫌でも分かる。

センターティナーとして、周囲への不快感は最悪のNGだ。

(まだ、始めるなよ……)

自然と距離を縮めるために快斗が一步近づきながら内心で呟く声を彼はちゃんと受信しているのだろうか? そう思つて声をかけてきた少年を見やるが、残念ながら紺色の傘の下、瓜二つの顔で、外見では唯一他人だと自己主張する収まりの良い髪の下で眇められた双眸に、了解した様子は見られなかつた。

分かりやすい新一の態度に内心で苦笑する間に、ふと疑問がよぎる。

(けど、なんで今なんだ?)

大女優を母に持つ故か、探偵の演技力にはそれなりに侮れないとこがつて、今日も普通に喧嘩してふざけて喧嘩して笑つての何気ない日常だつたはずで、正直今更こうなるとは思つていなかつた。快斗はともかく彼は公明正大な理由のために、ずっと眠そうで、1・2時間目を熟睡した快斗が元気いっぱいにそんな真面目な彼を

からかつたのが原因か。ただ、彼を焼き付けた理由が何であれ、今日であるのはなぜだらう。予告日の近辺のみではなく快斗が寝るのはいつものことなのだ。今でも、似ている外見とは裏腹に彼だけが当たり障りなく問題児だったから、そのぐらいでは見極める手段にはならないし、事実今日のようなことは何度もあった。だからそれらの過去の日々と今までとの相違点を挙げるとすればひとつだけしか思い浮かばない。

（やっぱあれはまずつたな……）

昨日初めて、とあるビルの屋上で彼と対峙したのだ。数メートルは離れていたがそれで十分だったのだろう。けれどそれすらも、何の証拠にもならない。

高校生黒羽快斗とあの月下の奇術師を結び付けるものは何もない。

だから、こうして余裕で構えていられる。いつもお調子者の笑みを顔に張り付けて。

「どーしたんだ？ 惨い顔しちゃって。これから待ちに待つた布団がオメーを待つて

「快斗、ちょっと来い」

そのまま快斗は問答無用で新一に掴まれた腕が引かれるままに、脇道へと引っ張られていく。あれだけ濡れないようにと注意を払っていたのに、全てが一瞬のうちに無に帰してしまった。既に治療は施して特殊メイクもしているが、未熟者の証のいくつものかすり傷が雨に打たれて痛みを思い出し、不協和音で呻き始める。

「ちょ、ちょっと新一何すんだっ！ 手離せって強すぎだらう」

ただ、勿論顔はポーカーフェイスで、掴まれたその手に全力で抗議する。

その姿はやっぱり普通のじゅれあう男子高校生。片方だけ血氣盛

んで少し場の空氣からはズレていっても、少なくとも快斗は下校途中の生徒達にまともに映る。それが憐れみの視線ではなく、呆れであるのは、こわさか辛いがどうしようもない現実で、更に言えば今は好都合。

顔でも態度でも伝わらないのなら、彼以外に通じる演技を見せつける。それも、普段の自分と限りなく近い、単なる高校生の黒羽快斗を。

この名探偵を欺くのはもう無理だと早々に両手を上げている分、そこ以外には絶対に漏れないように。

それは多分自分のためであって、彼の為でもある。

一緒に部屋に入るまで待てなかつたのか、改めて呼び出すのが面倒だつたのか、実は短気で思いこんだら猪突猛進な彼が現在もそうなつてているのは、それだけ焦りがあるからだ。

掴まれた腕は、感覚がなくなる位に強く、何も語らない背中は眞実を追い求めているのに、その実限界まで否定している。それは探偵であり親友であることからのどうしようもない葛藤の表れで、確信しているくせに、あえてこんな手段を選ぶ新一に、少々くすぐつたいたものまで込み上げてくるくらしげだ。

「なー新一どこまで行くんだよーオレびしょ濡れなんだけど

体の半分以上濡れてしまつて、今更目的には何の役にも立たない傘をそれでも往生際悪く片手に握りしめて顔に翳して、文句たらたら。

少々無理のある体勢でも快斗にとつては簡単なこと。その姿はさながら母親に無理やり引っ張られてだだをこねる子供、あるいは浮気が見つかって激怒中の彼女に引っ立てられていく彼氏、そして

警察官に連行されていく、強盗犯

(こや、最後のはシャレになつてねーよなあ)

そんな空笑いをこぼしながら、どうすつかと危機感ゼロで賑やかに引きずられていく快斗は、降りしきる雨を一旦受け止めて外に伝い落ちるはずの雲が、髪を濡らして額に張り付く鬱陶しさについに傘を放棄した。

勿論それは指先一つのマジックであつといつ間に消失させてしまう。ついでにぺたんこの学生鞄も一緒に。

周囲から少々のざわめきが生まれる。閉じたと同時に煙を立てて消えるなんていう、非科学的な現象に彼が何者か分かつていても、向けられる睡然とした目。脇道とはいえ寮に続く近道を通る者はそれなりにいて通りすがりだつたから余計に驚きも大きいのだろう。

それは別に、サービスでも、罪悪感からでも、状況緩和にふざけているのでもなく、彼の日常だ。マジシャンを指し、邁進するため、いついかなる時でも修練を怠らない。

快斗は今、夢を追いかける一人の少年なのだ。だから、引っ立たれることもそれなりの理由。そういう認識を植え付けて、見せつける。

勿論それが彼に通じるなんて期待は欠片もしていないし、事実足を止め振り返つて得意げに笑う快斗を荒く息を吐きながら憤怒の形相で睨む新一の心は、手に取るようになりやすいのだけれど……。

更に機嫌を損ねるつもりなんてなかつた。それだけは本当なのだ。ただ、黒羽快斗の日常を正確になぞつたら、そうなつただけの話で。

そもそもはやそんな風にしか自分を出せない自分の今に、密かに心の中だけで自嘲しながら。

「何、新一？」

快斗は十分に分かり切つていて、それを無邪気なふりして問い合わせる。

彼からは、カードをだすよりも、勝負する始められないのだ。
戦意がないと言つのではなく、相手の向けるそれを、お門違いだと笑うことしか出来ない。

それが必要な日常はもう少し後だと思つていたけれど、さつと彼はそれを日常にする気はない。だからこんなにあからさまに怒つて……真っ向勝負を挑んでくるのだ。

「なんでんなことすんだよつ

「え？ いや、オレのアイデンティティだからビーフिंグされても

……
「ふざけんなつ

額から伝い落ちる雨のせいだろうか、彼の激昂が辛そうに歪んで見える。

「別にふざけた訳じゃねーんだけど……」

そしてまた快斗も、望んではいない。

そんな、悲しそうな疑惑心暗鬼な日々なんて。

ただ、小出しにして、お互に腹をさぐり合いつのまつぱらだけれど、認めてしまうことも同時に出来ないだけ。それは、彼自身の決して低くないプライドの問題では、ない。

『誰にも言わない。巻き込まない。特にこの名探偵はあの日立てた誓いが今も快斗の中にあるからだ。
卑怯かもしれないけど、彼から歩み寄ることはない。踏み込まれたら、誤魔化せないと分かっているから』

(ああ、どうくる？ 名探偵)

むしろそれだけの覚悟がないから、来ないで欲しい。
そして来たとしても、彼を閉じ込める策は既にある。
彼を安全な場所に据え付けて、綺麗で少しだけ非日常な世界で満足させるだけの。

……だからついて行く。文句を言いながら雑草が繁茂し放題のこんな寂れた場所まで。

快斗が連れて来られたのは、寮の裏手にある、物置小屋の裏。寮からは少し離れていて位置的に彼らの姿は寮の窓からは見えない。

まさしく、尋問にはうつてつけの場所だなど快斗は漸く離された手をぶらぶら揺らしながら不自然ではない程度に苦笑した。

追いかける者

(どうじてくわよつコイシ)

いつもながら見事な早業で傘と鞄とを消し去つて、今はその代償ですぶ濡れになつてゐるというのに、全く意に介さない旦の前の男。それどころか、逃げる様子すらなく苦笑いしながら、何にか、は知らないが、いや、分かつてゐるからこそ、自由になつた諸手を上げての降参ポーズまでとつてみせるのだ。

『全く状況が理解出来ねーんだけど説明してくんねーか?』

雨によつてすっかり癖毛がなくなり、ますます自分の双子のような彼から、そんな声まで飛び出してきそうで新一は顔を背けた。たとえ、その単語を名前に持つていても、内実までそつとは限らない。むしろ快斗は、化け物並みの知能指数を持つ頭脳派の男だ。努力なしで悔しいとか生意気とか言う以前に、それで苦労した過去まで逐一知つていて、そんなことにはもう何の関心も示さないようになつていた。

だから彼に分かつていい筈がない。

あの連行の中腕を振り解く事だつて出来たのだし、ましてや今は何の拘束もしていない。いくらでも隙はあつた。

それでもなお、ここにいるのは、たとえ全力でとぼけていても、受け入れるということだろう。分かつてしまつのは癪だが、それはもう、長年の付き合いが生み出す副産物で、自分でもどうにもしようがないほど確信がある。

だから、彼はきっと分かつてゐる。新一が最終的にどんな未来を導きたいかを。それが自惚れでないことを胸中密かに願う。

それは、彼の為ではない。自分のためにだ。

でなければ、確実に年月に対する予想的中率とかいう限定期的なものではなく、今まであつた10年が軽く音を立てて崩れていくに違いないから。

絶対にこの勘は外すわけにはいかない。

舞台裏なんて、存在すら許されない。

けれど、いつだつて真実はたつた一つ。

もしも新一の願いと快斗の想いが別物ならば、その時は、縁を切る。

心証だけで警察には突き出せないし、窃盗は現行犯が鉄則。先程から執拗に彼が見せる高校生黒羽快斗には、何の罪状も出せない。

けれど、確信した心までは誤魔化せないのだ。
だから、もう、余計な回り道はしない。

「どうしてだ、快斗」

ただ真正面から単刀直入に斬り込んでいく。いつもより低い声が微かに震えていた。怖いのでは当然ない。5月とはいえ雨は冷たく、半分濡れた右腕は寒く、冷えたアルミの棒を握りしめる手は今にも凍傷になりそうだったからである。

「へつ何が？ ああ、傘ささない訳？ そりやこんだけ濡れたらもう正直どうでもいいし、またマジックしたら新一怒

「そうじゃない」

簡単に口を割るとは思わない。今まで隠し通せたのだから、そのI/Oをフルに使って己の腹を欺いてきた結果なのだから。

「じゃあ何？ オレ心当たりなんてないんだけど」

のらりくらり。小屋の僅かな雨樋の下で、冷たい体には不釣り合

いな穏やかな目。焦りなんて何もない。無実どころか、こちらの怒りの原因すら分かつていないと肩をすくめる。普通なら『間違えました』『めんなれ』と言ってしまいそうになる少し傷ついた田すら向けてくる。

だが、それは全て演技。ここにまかされるようなら入ってくるなどいう牽制。そこまで確信しているからこそ彼は聞合いを詰めて更に挑んでいく。

「どうしてテメーはキッドになつた……」

気がついたのは、つい昨日のことだった。空気は全然違うのに、間近で田を見たら分かる、というよりも直感した。そして、今日の昼休みに覗きこんできたからかい交じりの表情にその幻影をはっきりと見た。どうして今まで、気がつかなかつたのか分らない。それほどその蒼い田は表情こそ正反対でも同じ物を宿していたのだ。

もちろん、彼はきっと簡単には認めない。

「はあ？ 何それ、夢物語にしては随分斬新な設定だけど、マジック以外にオレアイツとの共通点ねーじゃん」

キッドは気障で優雅で、紳士だろ？ オレ自分で言うのも虚しいけど、ガサツだし問題児だし、あんなセリフ言えねーって。

そうでなくては、困る。

予想通りの言葉に新一は唇を薄く引いて吊り上げる。

「それが……演技だとしたら？ 今のオーメーみてーによ」

「あのねえ新一、疑心暗鬼になりすぎだよ。大体オレがキッドだったとして一体何のメリットがあるつての？」

「…さあな」

それは快斗しか知り得ないが確實にあるのだろう。そうでなければ彼はこんな道は選ばない。だからこそ知りたいと思う。しかし彼

はそれを許すだろ？が、確信を得るだけでこんなに拒まれていろといつのに。

それでも新一はさりと一歩快斗に近づいた。

「正直に言えバ快斗……」の状況から解放されたいならな

「つたく新ちゃんつてばほんとに乱暴なんだから……お母さんはそんなん子に育てた覚えは

「ふざけてないで吐けっ

声はそのままのまねごとに構わず新一が詰め寄ると、快斗はむくられて彼から視線を外す。

「持つてないものは出来ませーん

そして両手を振り上げた快斗がぐるりと手首を回転させる。ぽん

つと音がして、そこから紙吹雪が飛び出した。

新一は一瞬何が起つたか分からずに目を瞬かせる。だが、目の前の一歩始終を見て面白そうににんまりと笑う顔を見た途端、新一の懸命に耐え堪えていたリミッターは音を立ててねじ切れた。

「ふざけんなよ快斗っ

傘を投げ飛ばし、それが地面に落ちる前に、そして一瞬真顔になつていた彼が微かに唖然と浮かべる前に、新一は快斗に詰め寄つてその胸倉を掴み上げていた。雨に濡れた分だけその体は重たいが、今的新一には関係なかつた。つま先だけは着いたまま快斗の足が僅かに宙に浮きあがる。

「……な、んの真似、だよ」

当然のこととして途切れながら初めて怒りをぶつけてくる快斗。

それは演技か、それとも……素、なのか。

しかし、怒りはあるで泡がはじけるよつと、彼の中には既になかつた。

今更気が付いた温度差。

快斗の学生服は雨に濡れ、異様に冷たかつた。多少の雨宿りしたつて変わらないくらいにぐつしょり色が変わっている。対して新一は今まで傘をさしていて、怒りに震えながらもそれ以外のことには頭が回らなくて、回す必要すらなくてただ問い合わせることに必死で。

今も目的の為だけにずぶ濡れのままこんなとこに立たせている。それでも快斗は新一の顔を見ている。少しだけ、ポーカーフェイスの外れた歪んだ顔は彼の顔にひつきりなしにかかる雨の雫のせいなのか。だが表情がどうであっても決して瞳は逸らされない。

（何……やつてんだ、オレ……）

「答える……」

今は強引に押し問答している時じゃない。快斗が傘をしまったのは自業自得だし、今となつては真意を知る術もないけれど、何を言つても彼が現在水を被つた今は変わらない。これ以上彼に付き合つて時間を割くつもりは、たとえ快斗が良かつたとしても新一には毛頭なかつた。

「……」

掴んだ手から力が抜ける。快斗は後ろの壁までたたらを踏んで寄りかかった。

息が荒いのは興奮しているから……？

「全部、嘘か？」

真実を追い求めるだけでは、名の付く探偵にはなれないのに、そんなことすら忘れている自分に自嘲しながら問いかける。ただもう、それだけ聞けばあとはどうでもいいと素直に思いながら。

絶対に新一がどれだけ疑おうと快斗は尻尾を掴ませない。

そして、きっと分かり合えない。犯罪者と探偵は正反対の道を行く。罪を犯す者と罪を裁く者。

たとえ今まで親友という同じ時を刻む者たちであつたとしても

だが、求めるのは、慣れ合いじゃ、ない。

「……んなわけ、ねーじやん」

やっぱ新一ってバカだよなあ

小さな声に顔を上げれば、快斗は笑みを浮かべていた。

ああ……快斗だ。

たつたそれだけの事に新一は心の底から安堵する。
小さな頃からずつと見てきた人懐っこいけれど少し咎めるような

目。

事件に遭遇して、不謹慎にも興奮してしまった時
殺人犯を自殺に追い込んでしまった時

快斗の父親を侮辱されて自分のことのようないきり立つた時
彼はこんな目で新一を見ていた。いつもなら飛び出していつし
まうお調子者の彼にそんな顔で見られると、体にたまつた熱がすう
つと溶けていくような、そんな錯覚に陥る。

「……」

そして今もそうだつた。

「んだよ、つたく……なんことあるわけねーじやんか。少し考えり
や分かるだろ?」

「……」

呆れ混じりのため息。髪を搔き上げる仕草。壁に寄りかかつたま
まざるすると座りこんだ快斗は立ち上がるつとはしなかつた。ただ

まっすぐに新一を見据えている。

彼の言つとおり、少し頭に血が上っていたのかもしれない。雨で体が冷えていく感覺にそんな風にも思つた。

だから

(これで、ここまでで、いいのか?)

冷静な自分がふいに聞いかけてきたのだろう。

その答えは、もちろん、たとえぬれ鼠になつていたとしても。

「嘘つくなよ……」

NOに決まつていた。

もう今は同じだけ濡れて同じ場所に立つている。

そして快斗がそれを赦すから。ただ座つているだけの彼が、それ故に告げてくること。

今、もしも、ここで追求を緩めたら、一生腹は割られない。信頼は出来ても信用は出来ないままになる。

もう気づいてしまつた。

快斗の中のその存在に探偵として、自分があるには、困難なほど近い場所で欲しいのはあいまいな答えではなくて真実だ。

単なる愉快犯だとか、力の誇示だなんてハナから思つちやいない。警察に突き出すつもりだつてない。だから嘘じやないと言つのなら、せめて、本当の事ぐらい話して貰わなければ困る。

また正々堂々と戦つために

「嘘なんてついてねーって言つたる」

「……なら話せ、オレは早く部屋に帰りたい」

オメーのせいですぶ濡れだと言え、お互い様でしょと返しながら快斗が立ち上がる。そして新一が放り投げた傘を拾い上げ、水しぶきを飛ばしながら駆けてくると、まつりとその動きを皿で追つていた新一に、差し出してきた。

「ほい、あんま濡れると風邪ひくぜ」

「……それこそお互い様だろ」

受け取った後、ぼそりと漏らした新一の呟きは、快斗の出したぽんつと言つ音で搔き消えた。

快斗の手の中には先程消したはずのあの傘があった。

しばし二人は、傘を差したまま、見つめ合つた。それは、どちらも容易に動けないからであつて、腹の探し合いではない。体を滴る水が遮られて、今更のように、冷たさと身震いを感じるのを、双方氣力で押さえ込んでいるのが、長い付き合いでわかつた。

その緊張感を打ち破つたのは雨に打たれていた時間が長かつた方だつた。

傘を微かに動かしてその瞳を隠す。新一は身を引き締める。

「じゃ、オレがもし、嘘をつくの、止めたら?」

小さく、投げられた問いに、新一は息を呑む。

「つつ……別に何もしねーよー」

新一が滴るしぶきと共に吐き捨てると、快斗は瞬間的に傘を上げ、含んだ笑みと共に新一を覗き込んだ。

「まさかそれって……慈悲とか?」

「バーロオッあんまりオレを見ぐびんじゃねーつ!」

だが、新一に思い切り怒鳴りつけられたといつに、快斗は今度は嬉しさを隠そともせず、一層笑みを深くするばかり。

「オメーマジ怪しいぞ……」

今や水滴を飛ばしながらけたけたと腹を抱えている快斗に、新一は一蹴する。けれど快斗が傘と共にステップを踏むように回り彼に背を向けると、新一の瞳に浮かんだのは穏やかな眼差しだった。

そしてその瞬間、この土砂降りの雨の中、一人の心は夏の日の空よしに澄んで晴れ渡つているとお互いに分かった。流れる空気がそれを証明していた。

「……条件がある」

雨音に混じり聞こえた声には、もう笑顔の余韻はなかつた。

「……んだよ」

「オレは嘘をつくのをやめる。その代わりオメーは余計な出だしもこれ以上の詐索もしない」

「もし飲まなかつたら……？」

「んなの、また1から繰り返しじゃねーの？ オレ嘘もついてねーしさ、面倒なんだけど……なあオメーだつてそうだろ……名探偵？」

「…………」

振り返り、なんでもなさそうに告げる快斗の言葉の最後にだけ件の気配を滲ませて。学生服に身を包んだ怪盗は今探偵の前で、唇をつりあげにいと笑う。

新一はその確信犯に歯噛みする。これは快斗の自分だからこそ唯一の譲歩だ。分かるけれど、納得がいかない。

「……わつとと言えよ」

だが、結局こいつ言うしかない。彼からこの繋がりは切れないし、切りたくない。彼のいるバカな騒がしい毎日の価値を知つていてる分だけ最後の詰めが甘くなる。

「これは探偵としては失格、でも……」

新一が返事をした途端快斗はその気配を消し去り、ふと嘆息した。そして新一が固唾を飲んで見つめる中、徐に口を開く。

「……私利私欲のためじゃねー。探し物、してんだよ」

「……何を？」

初めから分かり切つていた情報に、推測したら分かる答え。それだけでは取引として不当だという訴えを新一が瞳に込めて問い合わせれば、快斗は見透かしたように笑つた。

「じゃあそれ、教えたら、それ以上はもう詮索すんなよ？」

「…………ああ。誓つてやるよ」

快斗の口調からよっぽど重大な秘密なのだと知れた。おそらくマスコミも警部も誰も知らない。新一だけに「えられるその情報の価値に、彼の喉が知らず音を立てる。

「俺が搜してるのは、数あるビッグジュエルの中のどれかの中にあらつていつ、伝説の石」

新一は田を見張る。まるで子供の夢みたいな話だ。伝説だなんて、この科学の発達して海底の底までも感知できるこの世に、あるわけがない。普通ならそう笑い飛ばす。だが、他ならぬ快斗がそれだけの犠牲を払つて探しているのだ。

「……普通に見てたんじゃ分からねーのか？」

結局新一は更に問いを重ねた。

「ああ……月にかざす必要がある」

だから盗み出す必要があるのだと、田当てではなければすぐに返すのだと、今までの疑問は連鎖的に溶けて消えた。しかし、新一の人並み外れた探求心と頭の回転がき出す問いは、まだまだ尽きない。今度は取引とは関係ないところから怪盗の不敵な仮面を剥がしにかかる。体が興奮で少し熱い。

「なんであんな目立つ衣装なんだよ？」

「え、派手でいいじゃん？」

あつけらかんと言いつ快斗に少し気が抜けて、それでも気を取り直して新一は目を眇める。

「オメーが始めたのはどう見ても最近だよな。1代目はお前の親父さんだろ？」

「そーだけど、それが？」

少し快斗の表情が陰る。しかし、新一はその表情に注意を向けられず、既にその性に突き動かされていた。

「だつたら一体何の？」

「ちょっとストップストップ！ フェアが大事でしょ！ こういうのは。いつちが折れたら途端につけあがるなんて新一ってばサイテー！」

！」

快斗は新一の顔の前で大きく振り、最後には拗ねたように頬を膨らませる。その動作自体はわざといじっても、確かに今不当な手に出ようとしたのは新一だつた。

思つた以上に興奮している胸に手を当てて、落ち着くために長く息を吐き出しながら快斗を見た。

「ま……謎全部解き明かさないと気になつて仕方ないのが、探偵だから、このくらいは大目に見るよ」

そんな彼に投げられた快斗の呆れたようなしかし許容する声に、少しだけほつとする。

謎と聞いたら、簡単に好奇心は収まらない。だが、寄り添つつもりは毛頭ない。

そして、これ以上は、いらない。快斗の言葉はもちろんだが、開ける前に中身を知るのが、探偵なのだ。

落ち着いた途端新一は今更ながらに現在の状況を思い出し、長居は無用といきなり駆け出した。ところどころに水たまりの出来てい

るぬかるんだ道は、走りにいく。

「ちょ、ちょっとどこ行くの！？」

「うつせーな、帰るんだよ。部屋こいつ

快斗の仰天した声に振り向かれたま怒鳴つたら、彼はぽかんと新一を見ていた。

「なんだよ……」

「はーほんと新一ってば生活能力低すぎつ

直接答えることはなく、快斗は頭をガシガシと搔くと今までなかつた通学鞄をどこからともなく取り出して携帯を耳に当てはじめる。

「おい、一体、元気……」

彼のその疑問はすぐに解消された。

「あ、平ちゃん、悪いんだけどさあ、実はすっげー雨に降られちまつたから……そうそう、このまま部屋入つたら色々面倒だし……うんそう、合意鍵使つて部屋入つて……うん、ごめんなあ……ああ勿論、たつぷりサービスするし、何だったら部屋の掃除も……あ、そ

う？　はいはい……じゃよろしく～」

数分間ひたすら賑やかにしゃべっていた快斗は、携帯を耳から離すなり新一の腕を掴んで部屋へと続く外付けの階段とは反対方向に歩き出した。

「はいはい、じゃあレッヅゴー

「んつの離せ、どこ行くんだよつ

突然過ぎて新一ががなるが、快斗は全く手の力を緩めない。

「何つてそりやあ二人の愛を確かめに？　いやー新一がこんなにオレのこと考えてくれてたなんて、ほんと感激だよなあ！」

振り返ったその顔はいつもの軽いノリの高校生。つい先程までそれを切望していたはずなのに、現れたら現れたで無性に殴り飛ばしたい衝動に駆られる新一である。しかし、伸ばした手は快斗には届かない。歩くスピードが早いからだ。傘は役に立っているが、今だ

に時折目から滴り落ちる水滴が不快だ。

「つけんなつオレは眞実を知りたかっただけで断じてんなつ」

「あーはいはい、 続きはお風呂でゆっくりとねー」

「はああつー?」

今度こそ大絶叫の新一と心底楽しそうな快斗は、 数十分前とは全く逆の構図。 一人がそれに気がついてなんとなくほつとするのはまだ先の話だ。

今の彼らの頭の中はそれぞれの感情には違いがあるものの、 共同とはいえ一人つきりに決まっている密室でのことでいっぱい。

実は寮生たちのドアの前で大騒ぎしていた会話の内容は丸聞こえで、 生徒たちが、 まことしやかに禁断の双子カップルについて噂を囁く未来がすぐそこにあるというのも勿論、 今の二人には知る由など無かつたのだった。

追いかける者（後書き）

次回はおまけです。
二人のやり取りで解明されていない謎がありますよね。それが27
話に引っかかるてくるわけです。お読みくださいありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7886y/>

分かれ道

2011年11月24日21時51分発行